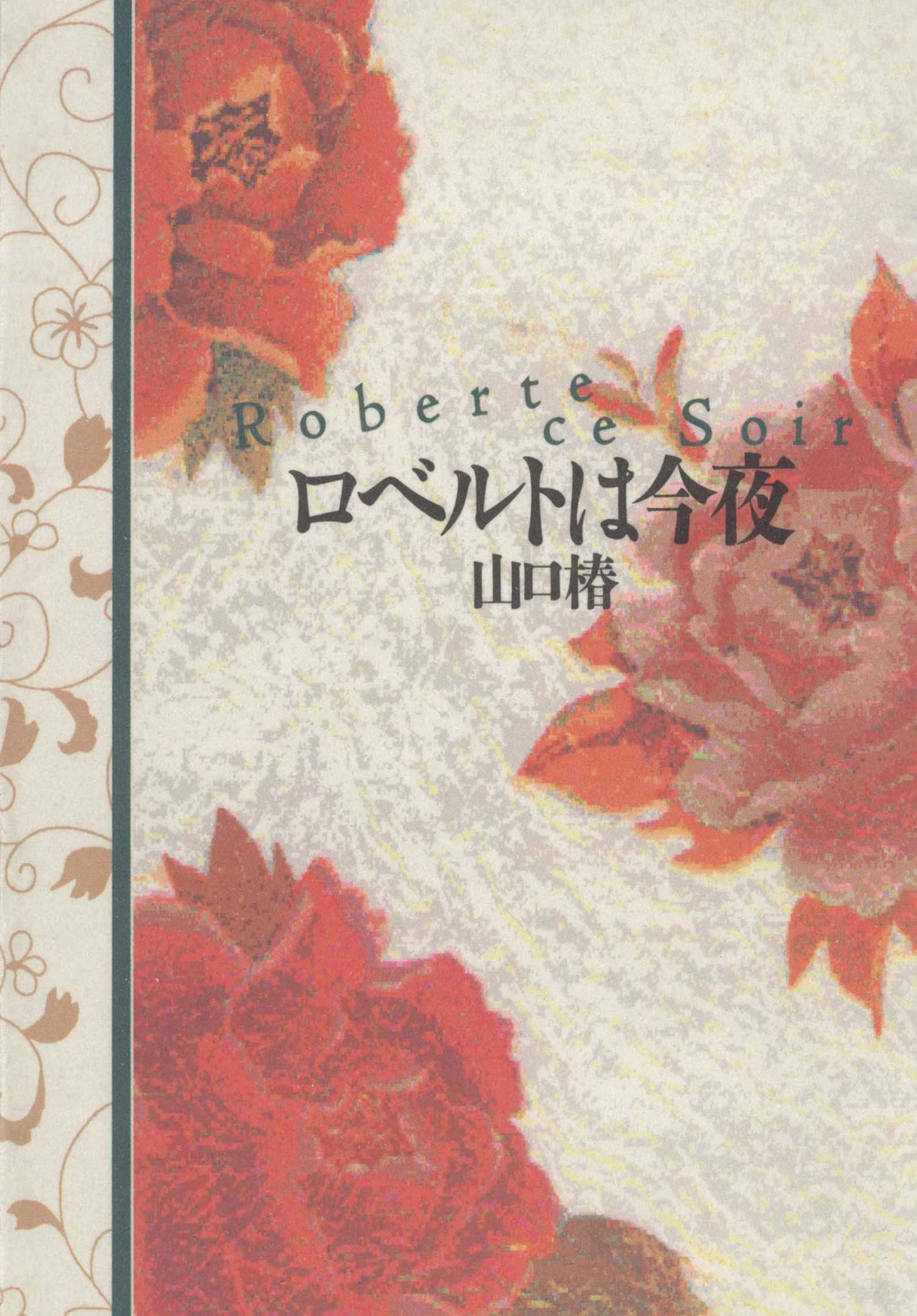


The book cover features a light beige background with a subtle, swirling pattern. Large, vibrant red flowers with dark centers are scattered across the cover, particularly on the left and right sides. A vertical strip on the far left contains a repeating pattern of stylized brown flowers and leaves. The title is centered in the upper half of the cover.

R o b e r t c e S o i r

ロベルトは今夜

山口椿

ロベルトは今夜

トレヴィル

ロベロは今夜

山口椿

初版印刷1989年12月15日 初版発行1989年12月25日

装幀★ミルキイ・インペ

発行者★金田太郎

発行★株式会社トレヴィル

東京都渋谷区松涛2-11-17-203 〒150 PHONE/03-481-5611

発売★株式会社リプロボート

東京都豊島区南池袋2-23-2 〒171 PHONE/03-983-6191

カバー印刷★東京美術印刷社 印刷★誠和印刷株式会社

製本★大口製本印刷株式会社

乱丁落丁本はお取り替えいたします。

¥1751

©1989 by Tsubaki Yamaguchi, ©1989 by TREVILLE Co., Ltd.

ISBN4-8457-0460-9 C0093

ロベールは今夜
Robertes Soir

目次

罌粟コクリコのように

5

薔薇と夜鶯イシザル

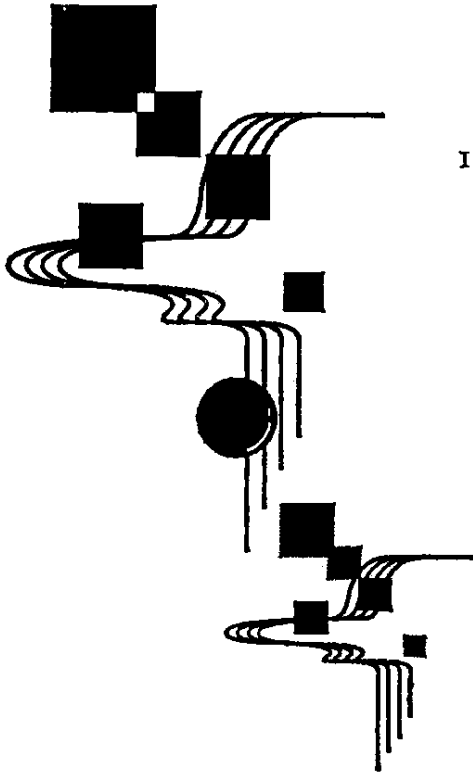
85

ロベルトは今夜

113

解説 ■ 植島啓司

149



罌粟のように

I

葡萄酒に混じって革の匂いをする。

踊りの輪が列になって、娘たちはくるくると回りだした。華やかなスカートが揺がり、白いひかがみと、しなやかな腿に眼が吸い寄せられる。時にふちどりをした下着が、派手な民族衣裳のかげでちらつくのが男には楽しい。

革の匂いをする。娘たちのブーツは、ひとりずつ、その足にあわせて作ったものだ。ジプシーの手先は、器用で速い。なめし皮をさらしているワゴンは、どこでも見られるジプシーの情景だ。踊りに使うブーツのしなやかさときたら、軽くてしかも脛に吸いつくようだ。革の匂いに混じって、汗の匂いをする。

一瞬ふり返って、娘たちの足をまたのぞく。ちいさい娘が、いつのまにかピアノのそばに居て、調性とちがう高い白鍵をひとつ叩くと、おもしろそうに笑い、踊りの輪に走りこむ。弦とクラリネットが、びっくりして、私をふり返った。



「おれじゃないよ」私はだれにともなくつぶやいて、肩をすくめ、あごでちいさな娘の後姿をしゃくってみせた。

「仕事をしているときは、楽器にさわるな」

ヨゼフ・ページは、ブタペストきってのジプシー・ヴァイオリンの名手だった。洒落たコールマンひげの伊達男で、舞台のこととなると厳しかった。ちいさな娘は、すぐふくれた。

「だって、この人ったら、後ろを向いて、女の足ばかり見てるんだもの」

「ちびは、おまえさんに気があるんだよ」

チェロ奏きが、そう云うと、太い指で娘のひらたい乳房に触った。娘は赤いブーツでチェリストを蹴り、私に向かって、顔をしかめ、ちいさな舌を出すと駈けて行ってしまった。手のつけられないおてんばだった。ワゴンのそばで立小便したり、クラリネットの先に布を丸めて入れて置いたりする。



ツインバロンがおもしろくて、いつもジプシー・バンドのそばに居た。チェムバロのように張った弦を、ヴィヴラフォンのように棒であやつる。アンドラシュはこれで、リストの書いた走句^{パッサージュ}だって、笑いながら奏いてのける。大きな人なつこい眼でみつめてから話かけた。「いっちょよう鳴らしてみるかね」

私は首をふった。こんな曲芸はできやしない。私が椅子から立つと、バンドは弓で胴を叩き、拍手のまねをした。久しぶりのピアノは鍵がすこし重いようだったが、《さくらんぼデセリーの咲くころ》を始めると、ヨゼフが寄ってきて、オブリガートで飾ってくれた。いやもうすばらしい即興だった。ヨゼフが旋律をとり、私は和弦アルペジオで飾りをつけた。そしてヨゼフは一時間も私を放さなかった。タンゴとハヴァネラ、いくつもの《踊り》チャルダッシュ、リストやコダーイ……曲のあいまいに、彼は私の耳もとに囁くのだった。「もっと、モルト派手に、な」

ヨーロッパのジプシーは、ある種のうさん臭さがつきまとう。疎外され、溶けこめず、孤立している。東側では、体制上そうした苦さはない。人々と軒を並べ、共に喰い、民族音楽家の地位を貰う。ワゴンに住んでいる者たちは、単に皮革業がもつ悪臭で、人々を悩まさないために、勝手に郊外へ棲みついているだけだ。

それでも、心の底には、血が持っているもののあわれがあらう。ヨゼフはある晩、私をつれてワゴンの友人の許に行き、酒の上ではしゃぎ、ひとしきり奏きまくったが、ふと、手をとめて云った。

「リトワニアに帰りたいな」だけど、リトワニアも、ラトヴィアも、もうない。祖父はルーマニアから来た。その前は？ 知らない。ヨゼフの濃いまつげに、露が宿っている。私に彼を慰めることばはない。いったい祖国のないさすらい人を、だれが優しくしてやるものなのか。

娘たちは陽気だった。手業にたけていて、布を染め、ぬいとりをし、よく喋り、縫いあ

わせ、笑いころげ、行儀わるく、声高にあられもない話を交わし、それでいながら、異民族の私には、決してちよっかいを出さなかった。例外は、あのこましゃくれた娘だけで、この子は、学校になど全く行く気がないから、自転車に乗って、気まぐれに私のペンションに、昼間から入りびたり、そこらをかきまわし、私の上衣を着ておどけて見せたりした。いくつかわからないが、細長い背丈は、私の肩あたりまでである。絶えず動きまわり、あぐらをかいて坐り、下着が見えても、かくそうとしない。罌粟コケリコが、いちめんに咲くころ、ヨゼフが綺麗なドレスを買ってくれる話をする。

「罌粟けしが咲くのかね？」

娘は笑いだした。

「なんにも知らないんだから。いちめんに咲くよ、丘も野原も、まっかだ」

「なぜドレスを買ってくれるのかね」知らない。と答えて、娘はクロッキー帳をめくって笑う。「いやだ女の裸ばかり。毛が生えてる。おとなになると真黒な毛が生えるんだよ」私は困ってクロッキーを娘から取りあげようとする。彼女は猫のようにすばしこく、狭い部屋を逃げまわり、やっとつかまえて抱きすくめると、急にきつい眼で私をにらむ。私はたじろいで、うすい骨ばった肩から手をはなすと、また、とびのいて、はじけるように笑う。



娘の訪れが絶えた。いたずら描きや、置き場所を勝手に動かされた日常の小物に直すたび、来ればうるさいのに、来なければさびしい、人待ち顔に、樺の並木を窓から眺めていたりした。

夜更けに、どこかで犬が吼え、眠りを破られた私は、窓の外に待ち人の足音を聞きつけた。

蒼い顔つきは、ただごとではない。娘はくるぶしまである長いスカートの正装をしている。髪の花飾りが抜け、結いあげた髪は乱れて額に散っている。

とりあえず暖い部屋に入れると、しゃがみこんで泣きだした。起こそうとする私の手を振り払って、ひとしきりむせんでいる。私は手のつけられない娘のかたわらで、泣きやむのを待った。

織くてかさのなかった髪が、黒さを増し、つやがあるのは、正装のために油をつけたからではない。ほんのすこしの間に、かすかに大人びた風情が、うなじや、肩のかたちに現われているようだ。

少女は不意に、そして、たぶん突然おんなになってしまうのだろう。

熱いココアを飲ませてやると、むさぼるように飲み、あわただしく鼻をかんだ。寒い、と云う。毛布でくるみ、ひざと足も包む。やがて、ひとつにまとめられた足を前後に揺すりだした。それは、静かにしていられない——いつもの仕草だった。

きげんが直った娘はいつものこどもじみた口調で語りはじめる。

七日ほど前に初潮が来た。私は、ああ、と面映ゆくうなずいた。ひらたい胸や、張りのない腰の内側で営まれることは、男の私には不可解で、謎めいたことだ。アップダイクが『女は月を回って還ってくる』と云った。のべつ幕なしに欲情している男に対し、女は潮の満ち干きを旅して往く。女たちが手当をし、教えてくれた。三日ほどで経血はとぎれ、うっとうしさが消えた。

今夜、女たちが娘を浄め、花で飾り、純白の衣裳を着せ、村の長の前に連れて行つた。いくつかの祈りがあり、娘の四肢が四人の男たちに押さえられると、銀髪の長老は、胡桃の張形リンガムを戴き、娘を破瓜した。次いで老人の数名が、白い正装のまま、娘におおいかさって胸と腹を押し当て、泣きわめく娘は解放され、手当てを受けた。

あまりのことに、娘はワゴンに帰されてから自失していたが、私に訴えに夜道をやって来た。

「痛いのか？」私の声はふるえていた。娘は黙って私をみつめる。この子の眸はとても美しい、と私は初めて思う。

「もういちど、手当てをしよう」私は指もふるえていることに気付く、それは、驚きなのか怒りなのか、あるいは、この場に全く適切ではないが、できごとの《不条理》に、度を失っていた。

湯を沸かしたが、ペンションに浴槽はない。シャワーのついた狭い場所は、冷え切っている。食器桶に湯をととのえ、娘をまたがせる。事の仕儀から、下着はつけていなかった。

手さぐりで洗う性器に、陰毛はない。私は自分が何も知らないことを恥じる。乳房がふくれ、陰毛が生い繁ってから初潮をみるのではないのだろうか？ 娘の性器は稚く、当然むき出ているだろう唇は、たよりなげに、そこはかとなく、おぞましい血の匂いがするでもない。そこは、娘の話が、まるでうそに思われるほど、指はなんの暴力の痕も探りあてることができない。しかし、指を差し入れぬ辺りに行われた傷は、私の胸にも刻まれた傷でもあった。おとなしく洗わせる娘が、私には憐れで、拭き浄め、熱いタオルで顔をくるんでやり、髪を梳くと、娘は初めて唇のはしで微かにほほえんだ。毛布にくるんだ娘を抱きあげた。

「どうするの？」送って行くよ、私は答えた。「だめ、ここに泊まる」娘はいつものせわしない話しぶりに戻っていた。親はいない。あたしはだれのものでもない。気ままに方々のワゴンで寝る。だから……



ブタペスト大学は、広すぎて、人がまばらだった。あれやこれやの末、会ってくれたのは背の高い女性だった。私が昨夜のことを、かいつまんで話すのを、彼女は神経質そうに眼鏡を指先でさわりながら聞いた。

「初夜権——*Ius primae noctis* のことですね。あの人たちの習俗は、われわれにわかりません。ローマでは生殖の神プリアプスの陰茎の上に、娘が座ることが結婚の儀式でした

し、中世の領主、聖者、僧侶は、破瓜が務めだった事実があります。張形^{リンガム}とはシヴァ神の陰茎ですからインド語で云います。たぶん、遠い祖先をジプシーは、謂われているようにインドに持っているのかもしれませんが……黒い髪、あの大きな眼^{ニユアンス}、その施法……それにしても、初夜権は、あなたがた男性が、眼尻を下げるような色合いのものではなく、もっと心理的な、いわば正当な意味をもっていると考えられます。

処女膜ノ破瓜は、女性ヲ男性ニツナギトメテオク——トイウ社会契約ノ結果ダケヲモツテイルノデハナイ。ソレハ、男性ニ対スル敵意トイウ古態的ナ反応ヲモヨビ醒マス。

破れてしまった結婚の原因に、破瓜ノハライセニ復讐ヲスルヨウニ女性ヲ駆リタテル動機、というものは、うまく筋道をつけると、冷感症の解明ともなります」

それから、彼女はくだけて話しました。

「わたしの場合は、こわされてしまった、というふうに思いました。これで、わたしの性的価値が下ってしまった、とね。それは、ナルシズムで言うとは侮辱でしたわ。それに、期待という夢がありました」彼女はすこし赤くなった。「男のひとも夢中ですからね。期待と現実は一致しません」彼女は立ちあがった。「あなたのちいさな恋人によろしく」さし出された長い指は冷たかったが、私はこの心の暖かい人が好きになった。



ペンションの中は暗かった。娘は毛布をかぶって眠っている。いきなり毛布をはねのけ

ると、娘は私に舌を出してみせた。やれやれ、哀傷も一夜かぎりのことだったか。

娘は私の首に両手をかけ、しがみつく。さびしかった。どこに行ったの、となじった。

甘ったるい臥床のかおりがふしぎで、私は娘を軽く胸に抱いたまま、寢息と髪油の入り混じった匂いに酔っていた。

「また洗って」

人形のように彼女はおとなしかった。着がえを持っていないので、私の下着をきせると、それはちょうど性器を掩う長さとなり、彼女はそれが気に入る、寝台にあぐらをかいて坐った。私は眼のやり場がない。でも、白い下着の下でちらつくものは、娘が動くたびに見えかくれし、私のこめかみは熱くなった。

「あたしも大人になったんだから、みんな手をだすね」

「え」、私はうろたえる。

「ベラはね、クレメンティナとやりながら、こっちへ来て見ろ、なんて云うのよ」

まさか、と私はいぶかしんだ。

「ほんとうだよ。アンドラシユはね、女をふたり並べてやるの。あたしがからだを洗っている、後ろから指を入れたりする」

「入るのか」

「ばか、入りやしないよ。水をぶっかけて、おかみさんに言いつけてやるんだ」

そうしたものが、と納得するふしはあった。ジプシーの間で、色恋も争いも絶えなかつ